30

江戸・明治期の貿易・販売資料に見られる西洋式医科器械について

ヴォルフガング　ミヒェル
九州大学大学院言語文化研究院

西洋の医療道具に関する情報は江戸初期の紅毛流外科の誕生と共に継続的に日本に伝わり、写本及び板本を通じて広まっていたが、これらのものが実際に医療に浸透したかどうかは現存の器物資料及び、当時の販売資料を通じて追究しなければならない。

一七、一八世紀の場合は断片的ではあるが、来日する東インド会社の船荷送り状及び出島商館の帳簿が、輸入品や、場合によりそれらの注文主に関する情報を示している。西洋医学の受容は長い間いわゆる「小外科学」に限られたこともあり、それに必要な比較的簡単な道具の国産化は早くも始まった。一八世紀初頭の『長崎夜話草』に見られる広瀬九左衛門は外科道具師として最も古い個人名のようであるが、蘭学の普及につれて天保年間から台頭する引き札には雙龍軒清水光邦、真竜軒安則、奈加本久則、一樹園正則、いわしや藤右衛門、いわしや藤吉など、道具師及び販売業者の名を確認できる。引き札に見られる外科道具の数は一〇〇点を超える場合もあるが、同じものに様々な寸法や材料があるので、鋏、毛引、篦、鍼、探り、吸角、玉抜、刀、焼小手、舌押、鉤など、基本的な道具の種類は十数種に過ぎず、幕末の外科術の範囲が限られていたことを物語っている。各種の品々を区別せずに列挙したものもあるが、「産婦道具」、「産科具」、「眼科道具」、「眼科具」、「地打外科道具」、「眼科器械」といった分類の試みも見られる。「歯抜」、「歯ヤスリ」、「口中万力」、「舌押」のように題目を設けずに一つの分野の道具をまとめることを分類と見なしてよいであろう。またところどころ道具名の前に眼科、産科とつけているのも確認できる。時代が進むにつれ外来の名称が増えているようである。「M：T」、「G：S」、「I：A」のようなローマ字印は舶来品のイメージを打ち出しながら、ブランド名を確立する試みでもある。真竜軒に至っては

製造者の意欲と誇りを示す「保証状」を添付していた。

明治二年、新政府がドイツ医学の導入を決議すると、漢方医学から西洋医学への転換が急速に進み、ドイツ製品を中心に大量の新しい医療器械が医療の現場に次々と登場した。その市場に着目した東京のいわしや松本市左衛門や石代十兵衛、大阪の山口庄兵衛と白井松之助、名古屋の八神幸助などが草分けであった。初期の医科器械商のほとんどは、薬種商、硝子壜商、鍼術用針製造業などから転業した者である。

石代十兵衛が明治一〇年に発表した『医用器械図譜』は、イラストと名称しか示していないが、一二三頁の頁数で日本史上初の医科器械カタログとなっている。その翌年、同じ東京の松本市左衛門は『医用器械図譜』を、そして明治一九年大阪の白井松之助は『医療器械図譜』を刊行した。一九世紀末までこの三つのカタログは、単なる販売促進のための資料というだけでなく、多くの医師にとって未知の器械を紹介してくれる絶好の教材であり、医科器械の普及に大きく貢献する製造販売者の誇りを表すものでもあった。

器械の挿絵や分類は海外の製造者の資料から借用されたが、大阪の白井松之介の事例が示すように、とりわけ簡単な鉄製器械は、短期間で自社の職人が作れるようになった。また、カタログの器械名に、以前の引き札にはなかった道具を考案した者の名も現れる。

かつてない勢いで成長する医科器械業は、近隣諸国からも注目された。明治九年、越後屋と共に医療器械で名を挙げた東京の鰯屋を見学する朝鮮人について、讀賣新聞が以下のように紹介している。

「駿河町の越後屋（呉ふく店）と、本町三丁目の鰯屋本店（きぐすりや）松本市左衛門、この両家へ、朝鮮人が近々に來ます。越後屋は廣大のところを見物し、鰯屋はかねて名高い医師の器械を見物すると申す事でござります。」（明治九年六月一日）

大阪と東京のパイオニアたちがこの有望な市場に着目し、進出するのは、もはや時間の問題だった。